



ことだま

言葉は言霊。・・・言葉は、「もう一人の自分」です！

今日、2/7（月）から「校内人権週間」です。相手の気持ちを考えた「言葉遣い」や学級の人権目標について考える活動を通して、お互いを大切にできる心情を育てます。コロナ禍にある今だからこそ、人として大切な学びになります。



まず、子どもたちには「言葉」が「力」をもっていることに気付いてほしいと思っています。日本には昔から「言霊（ことだま）」という言葉があり、言葉は「魂」をもっていると信じられてきました。「魂」ということは「心がある」ということです。私たちの口から出た言葉は、周りの人に影響を及ぼす「力」があるのです。

きれいなものを見たときに人は感動するものです。それを自分の心の中でそっと大事にすることもできるでしょう。でも、その感動を素直に「きれい。」と言葉にすると、周囲の人に伝えることができます。それは、その景色の美しさにあまり関心なかった周りの人にも気づかせることにもなります。また、自分の声が自分の耳に返ってきて、その景色の美しさは、目からだけでなく耳からも入り、全身で感じ取ることができます。

言葉には「不思議な力」があります。思っているだけだとあいまいに感じることも、表現すると確かなことになります。また、表現した言葉は自分に返ってくるものです。だからこそ、優しい思いやりのある言葉をつかわなくてはならないのです。相手を「馬鹿」と言ったら、自分に「馬鹿」と言っていることと同じになります。言葉のもつ影響力は大きいものです。優しい言葉は、ほかほかした温かな雰囲気をつくり出し、汚い言葉は、とげとげした殺伐とした雰囲気をつくり出します。

たった一つの言葉によって、人はうれしくなったり、悲しくなったりすることは、子どもたちも経験しています。「言葉はこだま」「言葉は言霊（ことだま）」、『言葉は、もう一人の自分』です。「人権」というたった二文字の意味を正しく理解し、常に意識して行動できる人になるためには、自分の「言葉」について考えることが大事です。どんな言葉を知っているか、どんな言葉を使うかで、「考え方」も「かかわり方」も変わってきます。

私たち教職員は、子どもたちとともに言葉に関する「感性」を磨き、温かくすてきな言葉があふれる葦高小学校をつくっていかうと思っています。

校長 藤井 朗

今日、全校の子どもたちと金子みすゞさんの詩「こだまでしょうか」を読んで、言葉の大切さ、言葉の力について考えました。

コロナ禍である今だからこそ、『言葉は、もう一人の自分である』ことを肝に銘じて、言葉の感性を磨き、すてきな言葉があふれる学校を、子どもたちと共につくっていきたいと思います。

こだまでしょうか

金子みすゞ

「遊ぼう」っていうと
「遊ぼう」っていう。

「馬鹿」っていうと
「馬鹿」っていう。

「もう遊ばない。」っていうと
「遊ばない」っていう。

そっして、あとで
さみしくなつて

「ごめんね」っていうと
「ごめんね」っていう。

「こだまでしょうか、
いいえ、だれでも。」